

# くまもと面白漫遊記

～川崎委員のおすすめのこの町・この人～

No.16

天草地区

## 天草は陶磁器の島を目ざす

江戸のダ・ヴィンチと云われるかの平賀源内が絶賛した天草陶石。  
調査によって17世紀の半ばに製造が始まったと言われる天草の磁器は、  
最上質の天草陶石により素朴な中にも白磁の美しさを永遠に漂わせる。  
有田焼を産み、宇宙船の耐熱材としても注目される世界に名だたる天草陶石。

その威厳を未来につなごうと窯元が動き出した。  
「天草陶石の里」は、新たな1ページを開け  
「平成の美」に向かって歩きはじめている……。



内田皿山焼（展示即売所）



窯 元



天草陶石



天草陶磁振興協議会・木山勝彦さん

## 天草陶石の里へ 天草陶磁の美と力を未来につなぐために窯元が集まった！

天草には世界に誇る陶磁器の原料「天草陶石」がある。天草陶石の発見は約350～400年前と言われ、不純物がなく白いものほど上質とされ、砕きやすい上、硬く美しい焼物に仕上がりに、有田焼の原料の殆どに使われていることでも有名である。かの日本のレオナルド・ダ・ヴィンチと称される江戸時代の天才・平賀源内は「天下無双の上品」と天草郡代に出した建白書に綴っている。天草陶石は、日本の焼物史に登場して以来、その名を陶石の代名詞として位置付けられ、今や全国の陶石の約8割を占めているほどだ。

天草下島、西海岸から天草町にかけての一带「天草陶石の里」は、天草の陶磁器生産の歴史を受け継ぐ場所でもある。天草の焼物は、慶長年間（1596～1615）に始まったとされ、秀吉が朝鮮から連れ帰った陶工たちによるものという説がある。その後、18世紀はじめとされていた磁器の製造も、最近の調査で1650年頃の染付が出土したことから、17世紀半ばには磁器の製造が始まったのではないかとされている。また、19世紀のはじめ、瀬戸磁器の始祖といわれる加藤民吉が瀬戸復興の熱い思いを抱き、天草で製磁技術の腕を磨いていることなど、天草の焼物の歴史も興味深い。

このような天草に脈々と流れる日本の源流とも言うべき陶磁器の歴史に、新しい1ページを刻む時代がやってきた。天草の焼物が「天草の産業」として飛躍するために『天草陶磁振興協議会』が組織されたのである。現在の天草の低迷する産業振興に窯元が一致団結して〈陶磁器の島を目ざそう！〉という試み。そこには、「天草の



焼物の歴史」を受け継いだ窯元の天草陶磁の美と力を未来につないで行こうとする心意気がみなぎっている。

天草郡荅北町、素朴な風景の中に赤いレンガの煙突が建つ「内田皿山焼窯元」。今も数多くの陶片が眠る「幻の窯・古内田皿山窯」の伝統を受け継ぎ、昭和45年に復興された窯元である。天草の川崎広報委員は『天草陶磁振興協議会』の会長木山勝彦さん（内田皿山焼 窯元・有限会社木山陶石鋳業所 代表取締役）を訪ね、陶磁器の島を目ざす窯元の挑戦を聞いた。

## 陶磁器の島をめざす、 それはいいものをいかにつくるかです……木山勝彦会長

川崎委員 Q：「天草陶磁振興協議会」を組織されましたが、その目的を教えてください。

木山さん A：『陶磁器の島をめざそう！』というテーマに取り組んでいます。  
平成11年に8つの窯元でスタートし、現在は9つの窯元が参加しています。  
さらに、来年は増えます。  
窯元が単独ではなく、集まって天草の焼物の良さを多くの方に知って頂き、  
また売り込んで行こうというものです。  
合同展示会を開いたり、パンフレットを作ったり、お客さんに窯を回って頂  
こうという窯元めぐりを推進したり、協力してPR戦略を展開することです。  
他に、若手の育成、焼物をする人を増やすことも大事な仕事です。

現在、「国指定の伝統工芸品」の申請を行なっているところで年度内には認め  
られると思います。

国が紹介してくれるということは知名度アップにつながりますし、活性化の  
補助事業として幅広い活動ができます。申請の際、天草陶磁器振興協議会を  
『天草陶磁振興協議会』にしました。

川崎委員 Q：『陶磁器の島をめざそう！』。それは天草活性化としての取組みですね。

木山さん A：天草には産業がなくなりつつあります。  
観光しかないと言ってもいい状況の中で、大切なのはお客さんに来て頂く

「交流人口」を増やすことです。

有名観光地には、有名な工芸品があります。

海と魚だけでない天草、それは《焼物》なのです。

天草にとって、観光と焼物は切り離せないもの。

つまり、それは島外の人を呼べる焼物、いいものをいかに作るか、ということなのです。

川崎委員

Q：「いかにいいものを作るか」。具体的には？

木山さん

A：天草には「天草陶石」があります。質量とも日本一、世界有数の陶石の里です。

天草の誇りである天草陶石を使って、陶器だけの窯も「磁器」を作り、「天草陶石」を共通の素材として、各窯がそれぞれの窯元の特徴を生かした磁器を商品化していきます。



のほり窯

川崎委員

Q：天草の窯元の特徴というと？

木山さん

A：天草の窯元は、それぞれに個性があるということです。

その昔、地域の窯元は、藩の保護を受けていましたが、天草は「天領」。天領というのは名ばかり、実は放ったらかしだったんです。

ですから、それぞれに工夫するしかなかったのです。つまり、それぞれの窯がルーツなんです。



## ■天草の焼物の歴史

天草でもっと古い焼物は「楠浦焼」と言われ創業は慶長年間（1596～1615）とされ、秀吉が朝鮮から連れてきた陶工たちの手によるものという説がある。記録に残る最も古い窯は1762年の高浜村庄屋・6代目上田伝五衛門が開窯した窯で、当時の「染付錦手焼」はオランダへも輸出された。

以後、天草には様々な窯元が生まれ、当時から現在に至る窯としては水の平焼、丸尾焼などがある。又、最近の調査から1650年頃には、内田皿山焼で磁器が焼かれていた事が分かっている。

## ■天草陶磁振興協議会

<small>そうぞうがま</small> 蔵々窯（大矢野町）	☎0964-58-0975
<small>みずのざいらやき</small> 水の平焼（本渡市）	☎0969-22-2440
<small>まるおやき</small> 丸尾焼（本渡市）	☎0969-23-9522
<small>いごいとうげがま</small> 息峠窯（五和町）	☎0969-32-1525
<small>とうきゅうこうぼう</small> 陶丘工房（五和町）	☎0969-32-2502
<small>うちざらやまやき</small> 内田皿山焼（苓北町）	☎0969-35-0222
<small>あまくさやき</small> <small>こざとこがま</small> 天草焼 小田床窯（天草町）	☎0969-42-3419
<small>たかはまやき</small> <small>じゅほうがま</small> 高浜焼 寿芳窯（天草町）	☎0969-42-1115
<small>あまくさそうじ</small> <small>ひさしがま</small> 天草創磁 久窯（天草町）	☎0969-42-0287

## 天草の焼物を担う若手の育成 天草陶石を生かした作品への期待

川崎委員 Q：若手の育成は大事な役割ですね？

木山さん A：若手を育成するということの一つは、展示の場をいかに提供するかということです。熊本県伝統工芸館で「くまもとの陶磁器展」などを開きました。天草西海岸の窯元が集まって「陶芸ま



つり」を春と秋年2回開いていますが、この成功を天草陶磁振興協議会の取り組みとして広げていこうと思います。

なぜ、展示会をするのかと言うと、作品を知って頂くだけでなく、販売したものでその人気分かるからです。

何を客が求めているか、若手の意欲につながります。



川崎委員

Q：若手は将来的には？

木山さん

A：独立を応援します。焼き手の数だけ焼物がある。

窯数を増やし、それぞれに特徴のある焼物を作っていきます。

また、島外からも受け入れます。うちにも唐津から来ている若手もいますし、島内外を問わず、天草で焼物をする人を支援していきます。



川崎委員

Q：木山さんの「内田皿山焼」について教えてください。

木山さん

A：天草陶石を使った最初の窯は「高浜焼」と言われていますが、最近の調査でう

ちの周辺から磁器の破片が沢山出土したんです。1676年の古文書に内田皿山の名が出てきますので、その前の1650年頃に磁器の製造を始めていたのではと思います。

そうすると、内田皿山焼が磁器を作った一番古い窯元ということになります。昭和45年、私が木山鋳業所の専務だった頃、苓北町にゆかりある私たちが「内田皿山焼」を復興しなければと思い立ちました。

現在、従業員は15名。タコ壺の生産は日本一、全国へ出荷しています。



川崎委員 Q：内田皿山焼の特徴とこれからの作品づくりについて教えてください。

木山さん A：使いやすい日用品作りを心がけて作っています。

磁器製品最高の釉薬（ゆうやく）と言われるのが柞（ゆす）の木の灰。天草陶石を生かす釉薬として天然の柞の木を探して使っていこうと思っています。

青みを帯びた、落ち着いた色合いが特徴です。

白さを追求するより、日本独特の白さを出せればと思っています。



タコ壺

## 陶磁器の島・天草への期待

### 取材を担当した川崎委員からの一言

『天草陶磁振興協議会』で窯元同士が手を組むことにより、これまでの観光主体の「天草の窯元めぐり」から一挙に「天草活性化」への大きなステップを踏み出したような気がして、同郷の私としては嬉しい限りである。

会長の木山さんは、表に向かった戦略とそれに対応する「いいものを作る」という二つの面を強調されていたが、まさにその通りだと思う。

戦略だけでは人は集まるがすぐに離れる。しかし、「いい物」からは人は離れない。天草に行けばいい焼物があり、天草陶石という財産を受け継いだ「本物」がある。そんな言葉が全国で聞かれる日はさほど遠くはないだろう。

天草を思う者、天草で仕事をする者にとって、天草に今、何があるのかを見つめ、どう未来につなげていくのか、教えられた取材であった。

取材先：内田皿山焼 窯元

天草郡苓北町内田 5 5 4 - 1 ☎0 9 6 9 - 3 5 - 0 2 2 2

参考文献：天草の窯元めぐり（天草百碗カタログ）

天草陶磁振興協議会